

「今日は何処に行こうかな？」

～生きがい・楽しみを作るために～

介護老人保健施設 リハビリタウンくじ

介護福祉士 松坂^{まつざか} 弥生^{やよい}、泥崎^{どろざき} 有美^{ゆみ}、○馬内^{まうち} 茜^{あかね}、大村^{おおむら} 美鈴^{みすず}

介護支援専門員 久保^{くぼ} 亘^{わたる}、作業療法士 下屋敷^{しもやしき} 佳子^{よしこ}、看護師 前野^{まえの} タキ^{たき}

1. はじめに

高齢者の生活は不安定である。入院や体調不良、病気の進行等の要因から ADL が低下し、離床や座位保持が困難になることで今までできていたことができなくなることがある。本事例では、定期的に外出することで楽しみを感じていた利用者が、入院を機に ADL が低下し、今まで行っていた外出が続けられなくなる事態が危惧された。しかし、利用者・介護職員・作業療法士・介護支援専門員がチームとして協力し合うことによって、退院後およそ1か月で入院前と変わらず外出を楽しめるようになった経過について報告する。

2. 経過

【事例】

氏名 S氏 81歳 男性 要介護度3

障害高齢者の日常生活自立度 C1

認知症高齢者の日常生活自立度 I

既往歴 S57年 交通事故（労災）により右下肢切断

H24年 変形性脊椎症手術

H29年 胸椎化膿性椎間板炎手術

H29年10月から約4か月の入院を経てH30年2月、胸椎化膿性椎間板炎手術を終え当施設再入所となる。再入所時、食事摂取以外は全介助状態でリクライニング車椅子を使用し、離床時は体幹コルセット・義足を装着し昼食時のみ短時間の離床であった。

退院から1か月経過後、S氏から「車椅子が合わない。購入したい。」と希望があり介護支援専門員・作業療法士と相談のうえで購入となった。購入後からゆっくりではあるが車椅子自操が可能となり、自室からユニットや食堂、自室のある3階からエレベーターを使用し1階まで自操できるようになった。現在では1階に来るパン屋や自動販売機からコーヒーやパンを買って来られるまでになった。生活が活動的になるのに伴い、徐々に離床時間も延びていった。

退院から2か月経過後、再入所後の生活にも慣れ、S氏から入院前のように外出したいと希望があった。入院前よりADLの低下が著しく、コルセット装着での外出は困難に思えたが、介護支援専門員が

ヘルパー付き福祉タクシーを手配し外出することができた。4 時間半の外出から帰設すると疲れた様子ではあったが、スーパー・本屋・ホームセンター・菓子屋などで買い物を行い満足した表情であった。

退院から 3 か月経過後、再び外出したいという声があり、前回同様に福祉タクシーを利用し買い物へ出掛けた。その日はコーヒーメーカー・雑誌・本・お菓子・惣菜等、好きな物を購入し帰設した。次第に毎月の最終土曜日が外出日となっていった。S 氏の居室は買って来た本が積まれてコーヒーメーカーがあり、やや狭く感じるが月に 1 度の外出が本人の楽しみとなっている。

3. 考察

今回の S 氏の希望を実現できるとは正直スタッフ一同想像していなかった。しかし、S 氏は諦めていなかった。「外出したい」その気持ちが向上心を引き出し、リクライニング車椅子から一般的な車椅子への変更や、長時間の離床が可能になる等、一つひとつ課題を乗り越え、希望であった外出が叶ったと思われる。S 氏に限らず、利用者自身の気持ちの持ちようで ADL や QOL の変化に繋がるのだと実感した。その気持ちを身近で支援している介護職員が汲み取って多職種へ発信し、相談し一丸となって専門的支援を行っていく事で、利用者の QOL がさらに向上するのではないかと考えた。また、利用者の喜んでいる姿や満足している表情を見て感じることで、職員のやりがいが大きくなり仕事に対するモチベーションのアップに繋がるのだと実感した。

4. まとめ

今回は S 氏の希望を叶える事ができた。しかし、その事だけに満足するのではなく、今後も継続して外出が出来るよう支援を行っていく必要がある。現状に満足せずに、職員一丸となり取り組んで行きたいと思う。今後利用者より、叶う希望と叶えるのが難しい希望が寄せられると思われる。例え難しい希望に直面したとしても、「その人の為に」という気持ちを忘れずに向き合い、どうしたらその希望を実現できるか、実現が困難でもその希望に見合ったものにしていけるかを多職種と共に検討していき、諦めずに支援していくという気持ちをこの事例を通して学ぶことが出来た。